



図書たより

NO. 28

Mar 2018

明治大学中野図書館



図書館員オススメの本

【かこさとし、福岡伸一『ちっちゃな科学：好奇心がおおきくなる読書&教育論』中央公論新社，2016】



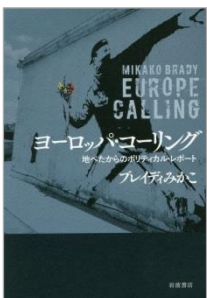
かこさとしさんは、誰もその絵をみれば、必ずみたことがあると感じてしまうような有名な絵本の作家。お歳は90歳をこえ、これまで手掛けてきた絵本は600冊以上、中でも素粒子から生命、宇宙など幅広く取り扱った科学絵本の第一人者である。福岡さんは、かこさんの科学絵本が大好きな生物学者で、この本はお二人の対談をもとに生まれた、科学をめぐる読書と教育論がテーマである。中野キャンパスにはそれぞれ理系の学生がたくさんいると思うが、科学に興味をもった原点をみな覚えているだろうか。勉強がたいへんな時、そんなことを思い出してみてもはどうだろうか。かこさんは、子どもの好奇心を満たしたり、刺激したり、楽しく意欲的に学べるような力をずっと与えようとしてきた。教育の仕事にたずさわる皆さんもいるだろう。子どもや生徒にどうしたら科学に興味をもたせられるか、そんなことを考えるきっかけをくれる本でもあり、文系の学生にも科学を見直させてくれる本である。

【稲泉連『本をつくる』という仕事』筑摩書房，2017】



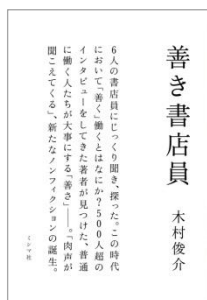
とても身近にある本というものが、どのように作られているか知っているだろうか？この本では作家である著者の目を通して、書き手や編集者だけではない、多くの「本を作る人々」が関わって、本が出来上がるまでの工程が語られている。読む人の印象を大きく左右する書体の重要性、製本技術を身につけて腕一本で工場を渡り歩いていた時代の技術の高さ、活字を拾って印刷する活版印刷を現代に残そうと奮闘する人、著者や読者の立場にたって原稿の誤りを直す校閲者、理想の紙を求めて奮闘する技術者、そして、本の内容をデザインという形で伝える装幀家。書店には多くの本が平積みになされている。その本を手を取る時、そこにはたくさんの人の情熱が込められていることを感じとっていきいたい。

【ブレイディみかこ『ヨーロッパ・コーリング：地べたからのポリティカル・レポート』岩波書店，2016】



海外の実態を紹介する本は、書き手の生活環境や思想・趣味によって題材も切り口も全く異なってくる。この本の著者は在英20年、保育士兼ライターという異色の経歴。勤務先は低所得者向けの保育所であり、イギリスの「地べた」とも言える場所だ。本書は、様々な困難に鍛えられた実生活者の視点でヨーロッパを切り取った政治批評集である。難しそう……と思われるかもしれないが、1つ1つのコラムは数ページで、舌鋒鋭くとも読みやすい。ヨーロッパの政情、経済・雇用・福祉問題、そして差別感情に揺れる市井の人々。読んでいっているうちに「これは未来の日本ではないか」「いや、既に同じ問題を抱えているのではないか」と思う方もいるだろう。本の帯には端的な一文が記されている——「もはや右対左ではない。下対上の時代だ」。

【木村俊介『善き書店員』ミシマ社、2013】



会社説明会での「先輩社員のお話」という数分のスピーチが、どれだけその会社で働くことの真実を伝えていただろう。

本書では、結末が決まった物語の部品としてインタビューを使うのではなく、「普通の人」に「長く」話を聞くことで「肉声」を描き出すことに挑戦している。書店員は体力気力をすり減らす仕事だが、高い収入や安定した雇用を得ることは難しい現状がある。「本当に好きじゃなければやめたほうがいい」という。それでも彼らは仕事に真摯に立ち向かい、自身の働く書店の地域における位置、また「本を読むこと」の社会における位置を考えている。

お金や地位とは別に「仕事の中だけであがなわれること」があるという一文がある。儲からないのに頑張るなんて、ばからしいのだろうか。しかし、働くことが辛くなる時、支えになるのは本書における「善さ」ではないだろうか。素直な言葉で働くことの真実が語られ、心に迫る言葉に出会える一冊だ。

【毎日新聞校閲グループ『校閲記者の目：あらゆるミスを見逃さないプロの技術』毎日新聞出版、2017】



校閲とは、字句の誤りに加え、元原稿に書いてある内容の事実関係にまで踏み込んでチェックすることという。最近では、校閲者を主人公にした小説やドラマもあったが、新聞は毎日誰かが校閲しているということも世間では意識されていなかったかもしれない。本書は、日々、数多くの記事をチェックし、誤りと格闘している毎日新聞社の校閲記者があらゆるミスを見逃さないプロの技術を伝授している。

日本語は歴史があって示唆に富み、表現力が高く実に素晴らしい言語である。一方で誤りや取り違えも多い。例えば、“雨模様”は降っている状態か、降っていない状態かご存じだろうか。“一人前”と“1人前”で意味が違ってくるのはご存じただろうか。日々言葉を使う中で意外と間違えているものだという事に気付かされたり、そこまで考えなければならぬのかと驚かされる。

コラムでは、現役校閲記者沢村有美さんの歌集『galley (ガレー)』が紹介されている。おもいを伝える技術をもつプロの言葉は胸にしみる。日本語表現の面白さや奥深さも堪能できる一冊だ。

■ 図書館からのお知らせ

■ 春季長期貸出の返却日について＞



返却期限日 4月 10日 (火)

※ 2018年3月卒業の学部生・修了の大学院生は返却日が一律3月26日(月)となります。

3月27日(火)以降は校友ライブラリーカード(有料)を発行後、図書館を利用することが出来ます。